

特集：中原中也の新しい貌

# 「夏の夜の博覧会はかなしからずや」

——インターテクスチュアリティの可能性をめぐる——

正田雅昭

(ひきた・まさあき)

未発表詩篇より

## 夏の夜の博覧会はかなしからずや

夏の夜の、博覧会は、哀しからずや  
雨ちよと降りて、やがてもあがりぬ  
夏の夜の、博覧会は、哀しからずや

女房買物をなす間、かなしからずや  
象の前に余と坊やとはるぬ  
二人<sup>しよぞ</sup>蹲んでるぬ、かなしからずや、やがて女房きぬ  
三人博覧会を出でぬかなしからずや  
不<sup>しのび</sup>忍ノ池の前に立ちぬ、坊や眺めてありぬ

そは坊やの見し、水の中にて最も大なるものなりき  
かなしからずや、

髪毛風に吹かれつ  
見てありぬ、見てありぬ、  
それより手を引きて歩きて  
広小路に出でぬ、かなしからずや

広小路にて玩具を買ひぬ、鬼の玩具かなしからずや

## 2

その日博覧会に入りしばかりの刻<sup>(とき)</sup>は  
なほ明るく、昼<sup>あかり</sup>の明ありぬ、

われら三人飛行機<sup>ひこうき</sup>にのりぬ

例の廻旋する飛行機にのりぬ

飛行機の夕空にめぐれば、  
四囲の燈光また夕空にめぐりぬ

夕空は、紺青の色なりき  
燈光は、貝釦の色なりき

その時よ、坊や見てありぬ  
その時よ、めぐる釦を

その時よ、坊やみてありぬ  
その時よ、紺青の空！

(一九三六・一二・二四)

一般的に言つて未刊詩篇まで深く読み込もうとする読者は、やはりただのファンではないのだろう。より深く中原のことが知りたいという心情。いわば、中原マニアとでも言おうか。

では、未刊詩篇を論じるとは、どういうことなのだろう。もはや古い対立図式となりつつあるが文学研究には、作家論と作品論という方法がある。未刊なのだから、詩人からすれば詩集に入れなかつた詩であるとも言える。そうした言わば外された詩から、既存の詩集に込められた編集意図を考える。未刊の詩から詩人の作風の交遷を考証する。未刊の詩から従来指摘されなかつた詩人の特質を読み込む。いずれにせよ、未刊詩篇研究とは、作家論に通じる道であるかとまず、言えるだろう。

マニアであつてもファンであつても作品を通じ、その作者に対する興味が尽きせぬものであるのは当然だ。特に中原の場合、その魅力的な伝記(と呼ばれることに本人がどう言うかは別としても……)が、逆に詩の魅力を引き立て

ている側面が否定できない。そこでテレビ・漫画を含め様々な中也伝説が二次創作的に氾濫し、人々の中にあるそれぞれ詩解釈とリフレクションをおこしている。それが今日の中原ブームを支えてきた訳だから、それについてとやかく言つても仕方がない。

だが、研究となれば話は別である。文学は学の權威を持つた制度である。安易な作家称揚であつても、それが学の場で生み出されれば、その作家神話の形成をより強固なものとすることもある。自分自身の本当の気持ちだつて分析し切れないのに、詩人の詩に対する「本当の意図」を捏造し、詩の解釈にとつて權威ある否定神学を構築してしまうかもしれない。

我々はむろん実証的研究の成果を全面的に否定するものではない。しかし、安易に詩人の伝記に頼らずに、詩と向かいあつてみることは徒勞だろうか。それも作品論が陥つた恣意的な解釈や「出口のない部屋」(三好行雄)に入り込むこともしないで……。

## 1

そこで、あえて「夏の夜の博覧会はかなしからずや」である。この詩を一切の先行知識なしに論じた論を私は寡聞にして知らない。この詩を記憶し称揚するものは、間違ひなく「文也の一生」というエッセイを読んでおり、それが中断されたところから接続された詩であることを知つていよう。そして現在刊行中の全集二巻に収録されている原稿

の写真（写真番号81〜85）の乱れた筆跡を見て胸を痛めていることであろう。

「文也の一生」は、愛息文也の死後、その思い出を綴ったものであり、昭和十一年七月末に親子三人で上野の「国体宣揚博覧会」に行った記事で中断している。それに引き続くこの詩の草稿は、記憶を記録として残そうと努めて冷静さを保とうとした父親の心情が、一気に爆発したかのようである。

全集の推定によるとこの詩が書かれたのは二月二二日。文也の死のおよそ一月後である。そして同月二四日に推敲が行われ、同日に「冬の長門峡」が書かれた。翌年一月九日には神経衰弱により千葉市の中村古峡療養所に入院した。つまり、作家論的に考えれば、現実の文也の死↓「文也の一生」↓「夏の夜の博覧会はかなしからずや」↓「冬の長門峡」↓詩人の入院というラインを想定し、論じてゆくことになる。だが、私はそうしたラインの経過点としてこの詩を論じることには違和感を持っている。詩人の悲しみの軌跡を追うという読みが間違っていると云っているのではない。そうした前提に頼ることが、そうしなければ読み得ない詩としてみなされることに繋がり、詩が潜在的に持っている魅力や別の読解の可能性を隠蔽してしまうのではないかと思うのである。

## 2

夏の夜の、博覧会は、哀しからずや

雨ちよと降りて、やがてもあがりぬ  
夏の夜の、博覧会は、哀しからずや

女房買物をなす間、かなしからずや

象の前に余と坊やとはるぬ

二人蹲んでるぬ、かなしからずや、やがて女房きぬ

「哀しからずや」というリフレイン。だが詩全体で見ればこれはあまりにも不規則で、中原が得意とする音楽的効果をもとどなしていない。二聯三行目に突然挿入されて来るあたりなど、もはや詩全体を食い破る様である。

何よりも不思議なのは、「哀しからずや」という理由が詩中においては全く示されていないことであろう。このリフレインを外すと、雨あがりの博覧会で女房が買物をする間、子供と象を見て、それから不忍池を眺め、広小路で兎の玩具を買ったという家族の思い出である。そこに「哀しからずや」とする積極的な事項は見出せない。詩人（語り手の意味で使用）が、自己の記憶を喚起しながらその記録に「哀しからずや」という語句を挿入してゆくことにより、読者はこの何でもない家族像に何らかの「哀しさ」を感じるのである。

これは、詩が語らなすぎるのだろうか。「文也の一生」という散文に浸食された心情により、詩が語ることを放棄したのだろうか。だが、考えてみてほしい。取り返しのない不幸。何でもない家族像の記録が哀しい思い出にしなければならない時がある。その記録が楽しげであればそれ

だけ、悲しみとして記憶は喚起されるはずだ。この詩は、詩人による「哀しからずや」という不規則なりフレインが、何でもない家族の記録を「哀しみ」の記憶として支配している。

今「支配」と言ったが、この詩が詩人の個人的な悲しみの感情に流されただけのものとして考えることは恐らく間違っている。それならば、何故この詩は文語で書かれているのだろうか。教科書に初めて口語敬体が本格的に導入されたのは、明治二〇年の『尋常小学校読本』である。以来、小学教科書においては、敬体口語／文語という文体が継承され、明治三八年の国定教科書の常体口語の大幅導入に先だって一八年間、敬体口語→文語という教育がなされていった。この国定教科書において初めて大幅に導入された常体口語は、以来少しずつ文語を凌駕していくこととなるだろう。中原は明治四二年の国定教科書第二世代にあたる。つまり、意識的にしか文語を使えない世代である。

もし中原が哀しみに支配されていたのであれば、「文也の一生」も詩も、他の多くの散文と同様に口語で書かれていっただろう。詩人は、わざわざ文語を使用することにより明らかに意識的に「哀しみ」を詩に閉じこめようとしている、つまり詩人は「哀しみ」を支配しようとしているのではないか。

その日博覧会に入りしばかりの刻は  
なほ明るく、昼の明ありぬ、

われら三人飛行機にのりぬ  
例の廻旋する飛行機にのりぬ

「2」になると「博覧会」での思い出になる。時間の順番からすると「2」は「1」よりも前の出来事である。タイトルの「夏の夜の博覧会」とあるわりには、「1」では「博覧会」での様子はほとんど述べられることはないのである。「博覧会」での内実が「2」に描かれるという錯時的構成は、タイトルと併せて鑑みれば、この詩が全体として詩人の強い構成意識に貫かれていることを示している。

「2」以降「哀しからずや」という語は一切現れない。思い出が「博覧会」の内実に及んだ途端にである。そして「廻旋する飛行機」からの映像で詩は終わる。

飛行機の夕空にめぐれば、  
四囲の燈光また夕空にめぐりぬ

事実として見れば、「廻旋」はいつか終わり家族は博覧会の会場を後にするだろう。だが、詩として見れば明らかに「廻旋」したままの時にその世界は閉じられている。

夕空は、紺青の色なりき  
燈光は、貝釦の色なりき

そして「坊や」も雨あがりの夕刻に「紺青の色」と「貝釦の色」の「廻旋」する世界に永遠に閉じこめられ続けるだろう。しかし、我々はその映像をもちや「美しい」ものは捕らえられない。その世界は「哀しからずや」とリフレインされる詩人の記憶の世界であることを知らされているからである。

ここで詩の中にあるともすれば見落とされがちな語、すなわち「例の」という語に注目することは、我々の立場に重要な示唆を与えてくれる。この「博覧会」が「国体宣揚大博覧会」であったことは、今の我々には知り得ない。しかし、「夏」「不忍池」という詩語を、同時代の読者が「博覧会」に結び付けることは容易なことだった。

上野の不忍池周辺とは、一八七七（明治一〇）年に開かれた政府主催の第一回内国勸業博覧会以来、数多くの博覧会の会場となった場所であり、いわば日本の本格的博覧会のメッカである。政府主催の内国勸業博覧会は全五回で終了したが、その後一九〇七（明治四〇）年、東京府主催による東京勸業博覧会が上野公園で開かれた。不忍池にまで用地を拡大し、池面に映る火花やイルミネーションは「まるで竜宮のようだ」と漱石に描かされた。さらにウォータースhootや観覧車までが設置され、殖産技術中心の初期の博覧会に比べると、エンターテイメント性がいつそう付加されてゆくことになった。

ここで「例の」という語を鑑みれば、「例の廻旋する飛行機」という語は、明らかに詩人の読者意識の表出と見て間違いない。ここで重要なのは「例の」という表現が、どの程度の当時の読者に理解されたかということではない。

この詩が、詩人の個人的な哀しみの表出や「文也の一生」における「飛行機」にのる。坊や喜びぬ。帰途不忍池を貫く

路を通る」などという記述の延長上としてしか理解出来ないという伝記情報至上主義が問題なのである。全集という書の使命として、作家の伝記的考証を追求してゆくことは当然としても、新全集にある様々な考証は同時代読者という新たな道へ接続する可能性を含んでいることを我々はあらためて確認してもよいだろう。

「読者」という概念は常識となりつつあり、作家を離れた解釈が許容されつつある今日、何を今更という声もあるだろう。であるならば、様々なテクスト同士の関係性も、そろそろ作家的時間軸の呪縛から解放たれるべきなのではないだろうか。例えば、高橋新吉の研究などは、従来中原への影響という側面からの研究であったものが、そうした蓄積からあらためて高橋新吉の詩を考え直す時期に来ているのではないか。つまり「中原中也の高橋新吉への影響」という可能性もあるわけである。

いわゆるインターテクスチュアリティであるが、あらゆる批評概念の常である様に、単なる「影響関係」という語の翻訳として使用されるケースも多い。しかし、「読者」という概念は、諸テクストの結節点であり、諸テクストのアナクロな関係を生み出す場所でもある。つまり我々には、中原の他の詩篇から「冬の長門峡」を見直し、そこから再び「夏の夜の博覧会はかなしからずや」の意味を問い直すというような可能性が開けているのではないだろうか。そこで最後に注目しておきたいのは、この詩における「夕方」の空の意味である。

やがても蜜柑の如き夕陽、  
欄干にこぼれたり。

あゝ！——そのやうな時もありき、

寒い寒い 日なりき。

「冬の長門峡」

季節は異なれど、同じ文語の詩世界において、詩人の過去の記憶が呼び起こされている。この「夕陽」をいかにとらえるかで、この詩の解釈は大きく異なってくるだろう。

周知の様に「山羊の歌」は「夕暮」の「前進します」という出発の「述志」に始まり、「ゆふがた、空の下で、身一点に感じられれば、万事に於て文句はないのだ。」という己の究極の理想を述べた「述志」で終わっている。

この最後のフレーズが、たった一行で独立して一聯を作っていることは、詩集の締めくくりとして、当然重要であるだろうし、こう考えれば「山羊の歌」において、「春の日の夕暮」が唯一のダダ時代の作品として、それも冒頭に収録されていることも、留意すべきことである。この詳細に関しては以前に拙論<sup>(註)</sup>にて触れたので紙幅の関係で割愛する。

中原のいわゆる「述志」の系譜を重要視すれば、この兩詩の間のどこかに、無理に断絶を考慮する必要はないだろう。そして、こうした夕陽への共感は、

落陽は、慈愛の色の

金のいろ。

「夕照」

海原はなみだぐましき金にして夕陽をたたへ

沖つ瀬は、いよとほく、かしこしづかにうるほへる

「みちこ」

と中原の詩において何度も繰り返されているイメージである。

むろん「夕陽」に共感を覚える「詩人」も、厳密に言えば、我々が作り出した虚像であり、それは実際の詩人の意図とは関係ない。しかし、もし我々読者が、こうした中原の諸テクストの結節点であるのだとすれば、「冬の長門峡」における「夕陽」もおそらくこうした詩人の共感するものとして読まれることが許されるだろう。

その時よ、坊や見てありぬ

その時よ、めぐる釦を

その時よ、坊やみてありぬ

その時よ、紺青の空！

そう考えれば、「夏の夜の博覧会はかなしからずや」というテクスト後半部における「紺青の色」をした「夕空」の「廻旋」に閉じこめられた「坊や」も、詩人に共感された美しきイメージとして詩に結実されたことが理解される。

その美しさが、前半部の「哀しからずや」というリフレインとコントラストを形成することにより、この家族像は、平凡であればあるほど、楽しげであればあるほど、逆説的に深い哀しみを漂わすのである。

(註) 拙論「述志」の詩集「山羊の歌」平成一〇(一九九八)

年一月「立教大学日本文学」79号を参照されたい。

——立教大学大学院博士課程——